

編集後記：今年の夏は暑かったですね。気象庁の報道発表によると今年の6月から8月までの平均気温平年差は統計開始（1946年）以降で西日本において第1位（+1.2°C）、東日本において第3位タイ（+1.1°C）、沖縄・奄美において第2位タイ（+0.7°C）だったそうです。高知県四万十市では日最高気温の日本記録を更新しましたし（41.0°C）、全国で143地点が日最高気温の地点記録を今夏更新（またはタイ記録）したそうです。

ちなみに東日本・西日本における夏の平均気温の歴代第2位は1994年でした。私はあの年の夏、独り暮らしの大阪で酷暑の中、大学院入試の受験勉強をしていたことを非常に鮮明に覚えています。8月末の院試当日、あまりの暑さに（あの頃は国立大学の教室にクーラーなんてありませんでした）腕から吹き出す汗で解答用紙がヨレヨレになってしまい、消しゴムで文字を消すことができなくなってしまったのも楽しい思い出（？）です。今年の夏もあの夏と同じくらい暑かったと思うと感慨一入です。

また、東日本・北日本の夏平均気温歴代第1位は2010年でした。気温の記録は年々変動が大きいいはいえ、歴代順位上位の暑さは1990年代以降に記録されていることが多いです。都市化の影響が比較的少ないとみられる全国17地点を抜き出した気象庁の統計（1898年～2013年）を見ても、夏の平均気温は1910年頃から1990年頃までトレンドがほぼ横ばいですが、1990年頃からその上昇傾向が明瞭になってきています。

ひょっとすると我々は日本の夏平均気温の気候値がシフトしている途中経過を見ているのかもしれませんが、複雑系（地球大気も複雑系の一つ）のカオス理論におけるローレンツアトラクターは xyz 空間内で蝶の羽のような形をしています。ある瞬間の状態を表す点は時折その2枚の羽の間をジャンプします。しかしジャンプしない時の点は周期的な円運動をしているように見えます。地球大気も同じように異なる準安定状態の間を時折ジャンプするのかもしれませんが、そのジャンプを我々は気候値のシフトとして観測しているのかもしれないですね。

地球温暖化は、もしそれが本当に「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」などの予測通り進行した場合、極めて広範囲の地域や人々に大きな影響を与えます（夏の試験勉強が暑苦しくなる程度では済まないです）。しかしこのような社会的影響の大きな現象に対しても、利害関係にとらわれず、何が真実なのかを可能な限り客観的かつ論理的に答えていくのが気象学に携わる者の責務だと思います。何でもすぐに結果を求められる御時世ですが、温暖化の観測や予測検証は途方もなく長い時間を要する作業の積み重ねです。100年前の観測データのおかげで我々は温暖化トレンドを計算できているように、我々のデータは100年後の人々の役に立っていることでしょう。100年後の日本気象学会の会員の皆さんは、2013年夏の暑さをどのように解析し、解釈してくれているんでしょうね。

（関山 剛）